



原爆被曝者

本間文紀子さんの講演から

編 集 部

はじめに

1945年8月6日、たった一発の原子爆弾によって、人口約35万人の広島市は壊滅しました。きのこ雲の下で、地獄のような惨状の中で死線をさまよって生き延びた人々。ここから、被爆者が歩むことになる長い苦難の道が始まったのです。

今年是被爆80年。残念ながら世界のあるちこちで戦争が続く、被爆国の日本政府は「核抑止論」にどっぷりとつかり、核廃絶禁止条約にも後ろ向きです。

また、証言者の訃報が続く、被曝の実相を広める活動にも支障が出ています。

被曝を過去の事としないで、人類の未来を保障する

核廃絶運動に生かしていかなければなりません。新潟県内在住の被曝者の思いや願いの「語り部活動」を引き継ぎ広めたいものです。

村上市在住の本間文紀子さんは、被曝者で、「語り部活動」を実践されています。当時住んでいた広島市高須地区は、原爆が投下された上空の直下、現在の原爆ドームから、距離約4km離れた場所に位置しています。被曝当時は、10歳でした。

本間さんは、2025年3月8日、国際婦人デー新潟県集会で講演をしました。その講演を記録した文章を掲載します。

記録文 赤井純治さん

午後は、国際女性デー：新潟県に参加。新潟県で今や唯一被爆体験を語れる人となった、村上市の本間文紀子さんのお話。広島で4kmくらい爆心地から南西に離れたところで、被爆の体験。小学校へゆく途中、空襲警報で飛行機が一機。飛行機雲。雲の合間に小さな黒い物体が・・・あれ、なんだろうね、と友も言いながら、学校についてからピカドン。気を失って。気がつくあたりは一変。最初のピカ、火花の何倍も強い赤。空いっぱい。わー綺麗と窓際に子供らはみんな駆けつけたとたんにドン、で気を失う。原爆でなければ、もう一度見たいほど綺麗だった、と。皮膚が火傷で剥がれ、乾いて、新聞紙が擦れるような音が今も耳に残る。と。お母さんから聞いた話：大きな目玉が2つ飛び出して、自分の腸がお腹から出ているのを自分で抱えて水、水という人が家の近くにいた、と「1」。

記録文 小東友子さん

「原爆はともきれい、原爆でなければもう一度見たいくらい。あたり一面が夕焼けを5倍にしたくらい

真っ赤になるの」からお話は始まりました。8月6日の朝、登校途中で見上げた飛行機雲の中に黒い点を見つけたこと、それが世界で初めて広島に落とされた原子爆弾リトルボーイであったこと、落とした飛行機が安全な場所まで逃げるため、パラシュートをつけ、ゆっくりゆっくり落ちてくるところを見たわけです。登校して間もなく原爆はさく裂し、爆音と爆風のため、腸がねじれるような感覚とともに気を失い、目覚めたときは学校のガラスが粉々に割れとび、天井が落ち、壁は倒れ向こうが見えるほどで、風景が一変しました。500人ぐらい児童がいて、奇跡的にけがしなかったのは、私と妹を含めて50人くらいだったでしょうか。いとこの児玉三智子さん、日本被団協の事務局次長をされていますが、頭にけがをしました。

爆心地から逃げてきた人は、どの人も「水をくれ」「水をくれ」でした。目玉が飛び出た人、飛び出た内臓を押さえていた人、背中が皮がべろりとむけた人は、ベルトのところで止まって垂れ下がりが、乾くと、動くたびにかさかさとした音がするようになっていた。まるで新聞紙が張り付いていたように感じました。よく原爆の絵を見ると指先から何かぶら下がっています、そ

これは腕の皮膚がむけ落ち、爪の先で止まってぶら下がるのよ。そんな人をたくさん見たそうです。

しばらくして貧血の症状で原爆病院に入院し、退院後もとても疲れやすく、貧血もあるそうで、原爆は時間がたつても、人の体をずたずたにしてしまうものと語ってくれました。

被爆の体験を話すこと自体が、その時を思い出すことになり、とてもつらいことですが、誰かが話さないと、また同じことが起きてしまう。話すことが平和につながるから話し続けています。戦争はもう嫌です。みんな仲良く、思いやりをもって、助け合って、明るい世界が一番ですと何度も話されました〔2〕。

【関連資料】

本間さんの従妹、児玉三智子の手記「あの日、あの時、そして今」がホームページ「ヒロシマ・アーカイブ」に掲載されていました。

1945年8月6日午前8時15分、広島に投下された原子爆弾によって、広島市は一瞬にして破壊されました。その時は国民学校2年生で木造校舎の

教室で被爆しました。学校まで父が迎えに来てくれ父に背負われ家までかえりました。その帰り道、この世のものとは思われない光景を、地獄を眼にしました。やつとのおもいでたどりついた私の家は爆風で屋根は飛ばされ、窓ガラスは粉々になり、壁、床、家具につき刺さっていました。広島北西部29キロの地域まで降った「雨」は、土砂・ほこり・すす・放射能を多量に含んだ大きな粒の雨「黒い雨」が、容赦なく家の中まで降ってきました。私は1ヶ月前まで、爆心地から300メートルくらいにあった本川国民学校に通っていたのですが、強制建物疎開で爆心地から3・5キロの所に転居していて、今日まで生きながらえることができました。建物疎開がなければ、私たち家族は人のかたちをとどめることなく、逝っていたでしょう。広島に投下された原子爆弾は、地上約600メートルの上空で目もくらむ閃光を放って炸裂し、大量の放射線と、強烈な熱線と爆風が一瞬に人を殺し、傷つけ広島市の街を破壊しました。直接被爆した人たちだけでなく、爆弾が落とされた後に、救援や、親子、兄弟、知人を探しに市内に入った人たちにも、脱毛、下血、紫斑などの急性放射線

症状を発症し多くの人が亡くなりました。残留放射能がどれほどの被害を与えているか、今でも癌や、白血病などで亡くなる人が後をたないのです。以前、爆心地近くに居たものですから、近所の人や、親戚の人が助けを求めて私の家に逃げてきました。その中に私の大好きな従姉のお姉ちゃんがいまして。お姉ちゃんは爆心地から500mのところで作業をしていたそうです。お姉ちゃんは顔半分、背中から右足までズルズルに焼きただけていました。暑いあつい夏です、爛れたところは化膿がドンドンひろがり、そこにハエがたかり、卵を産み、卵がウジになり、からだを這い回ります。私は大好きなお姉ちゃんのウジを捕り、体液を拭いてやる、そのくらいのことしか出来ませんでした。お姉ちゃんは「痛い、痛いよ」と言っていました、その声もだんだん小さくなり、たぶん3日の朝だったと思います、私の腕の中で息をひきとりました。14歳でした。5年生だった従兄のお兄ちゃんは何の傷もケロイドもありませんでした、下痢がつづいていました。ある日耳から、鼻から血を流し、口から血のかたまりのようなものを吐き出し突然亡くなりました。そのほかも、

8月の終わり頃までに叔父ちゃん、叔母ちゃんたち何人も人がつぎつぎと逝っていきました。亡くなった人たちは、戦争によって投下された原子爆弾によって殺されたのだとおもっております。それから原爆は容赦なく私を苦しめつづけました。就職のとき、結婚の時被爆者であるとういうことだけで差別、偏見を受けました。子どもを授かったとき、被爆者の子として産むかどうか考えるしみました。その当時被爆者は結婚できない、しない、人が沢山いました。子どもを授かっても死産、流産を繰り返す、無事生まれても早く病死するなど被爆者を苦しめていました。被爆者は「こころ・からだ・くらし」で苦しんできました。これが通常兵器とちがう核兵器の恐ろしさです。今、私がいちばんつらいのは、娘のことです。彼女は突然ガンに襲われ、手術をすれば良くなると信じ涙ながらに決断し、つらい手術をしました。いつ再発、転移するかわからない状態で手術後、からだの痛みのなか、治療、リハビリをしておりましたが突然逝ってしまいました。病(ガン)が発症して4ヶ月でした。この子を授かったとき放射線の影響がでないか迷い、決断して出産

した娘を亡くした今、悲しみと悔しさの日々ですが前を向いて歩んで行こうと思っています。娘がいつもそばにいて励まし、見てくれていると思うから。被爆者の子であることがガンに罹りやすいのかどうかはまだ証明されていません。しかし、被爆者の遺伝子に影響を与えることは明らかになっております。被爆者は被爆者であることだけで、65年を超える今でも、人生の節目、節目で悩み、苦しみ、嘆き、怒りをおぼえるのです。このような体験は皆さんに、そして世界の人々の上に再び繰り返させてはなりません。戦争を起こすのも、核兵器を使うのも、私たち人間です。戦争をやめさせるのも、核兵器をなくするのも、私たち人間にしかできないです。私も、命のあるかぎり、被爆の実相を語り、戦争も核兵器もない平和な青い空をこどもたちに手渡す日が一日も早く来ることを願って努力をしていきたいとおもっています。ノーモア・ヒロシマ、ノーモア・ナガサキ、ノーモア・ウオー〔3〕。

〔註1〕 赤井純治（新潟県原水協代表理事）さんが講演内容をまとめSNSに発信したものの。

〔註2〕 小東友子（新日本婦人の会新潟県本部会長）さんが講演内容をまとめ、別の日に開催された国際女性月間の街頭宣伝で報告したものの。

〔註3〕

<https://hiroshima.archiving.jp/index.jp.html>
「ヒロシマ・アーカイブ」で、「高須」の検索で、児玉さんの住まいの地区の航空写真が見られます。

（文責 小東由男）

